普通の印刷でできる面白いこと

福岡南央子

CMYK4色の掛け合わせを基本として成立している印刷物。
その基本の原理にのっとりつつ、紙とインキの物質感を掛け合わせながら、
ドキッとするような発見がないかと探してみました。
ごく普通の印刷のなかに潜んでいた、新鮮な視覚効果の数々を抽出して仕上げた作品です。

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●トライアルの背景

子どもの頃から「印刷されたもの」が好きでした。デザインという職に就いたのも印刷物がつくりたかったからです。そうして仕事を通じてCMYKの仕組みや、インキの掛け合わせに出会ってはその仕組みに感動し、印刷を日常の技術として吸収してきました。一方、徐々に印刷物以外の媒体で表現する仕事も増える中で、ビジョンを表現するだけなら印刷物を離れてもできる、とも感じるようになりました。「じゃあ、印刷物はなくなってもいいの？」とボンヤリと自問していたのと同じ頃、グラフィックトライアルのお話があったのです。

そんなわけで「刷られた魅力」をもう一度考える機会を得ました。そのとき最初に頭に浮かんだのが「紙とインキ」という印刷物を構成している物質そのものの存在と関係性、そして「CMYK」の存在でした。これまで長い間、先輩たちが写真や絵やさまざまな表現を四つの色に置き換えて整理・還元してきたCMYKという要素もそのシステムも、印刷物になくてはならないものです。この機会に印刷物の魅力の原点に立ち返って印刷物を見つめ直してみようと決めました。

●制作コンセプト

テーマは二つ。紙とインキによる物質的な関係と、CMYKの掛け合わせです。普通の4色印刷の中にも、紙とインキの関係で生まれる効果がたくさん潜んでいるように思います。そんな効果を発見するために、紙は印刷の質感が出やすいものを探し、そこに通常の印刷で使う4色・CMYKで刷る、というのが私のトライアルです。また、質感をさらに際立たせるための要素として銀を加え、自分の予測不可能な部分を大きくすることにしました。

構成としてはとにかくシンプルにする。そう考えたものの、これで5枚のポスターをどうやってつくるかが難問でした。行いたいことはインキの掛け合わせです。色玉で事足りてしまいますが、色玉ではポスターになりません。仕事ならば必ず表現すべき相手がいるのに、今回は相手となる商品も情報もありません。でもよくよく考えてみれば、原理原則的な視覚効果を伝えるためのモチーフを見つければいいと気づきました。そこで思わず見入ってしまうような視覚要素を持ち込んで伝えたいものを表現することにしました。

それが「顔」というモチーフです。人は目鼻立ちと同じような配置のものがあると、なぜか顔に見立ててしまいます。それがネジでも壁のシミでも、顔の要素とは全然違うものまで無意識に顔として見たいという衝動にかられます。それも、どうやら感覚というよりロジカルな何かが働いているように思えます。顔と認識したくなるような絵柄をつくれば、きっと「顔」を探して一生懸命見ようとして、伝えたい視覚効果に気づいてくれるかもしれないと考えたのです。

紙とインキ、CMYKと銀、そして印刷の視覚効果と自分の感覚。その掛け合わせから生まれたものが今回の作品になりました。

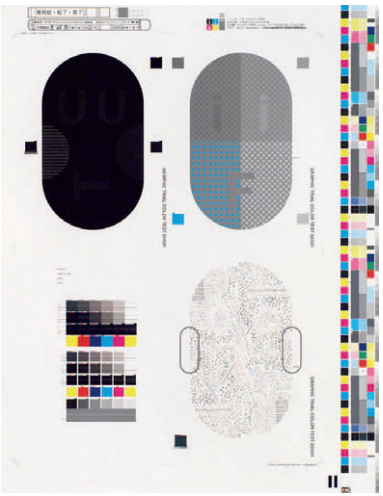
—— 福岡南央子

アートディレクター 福岡南央子 × プリンティングディレクター 渡辺 孝

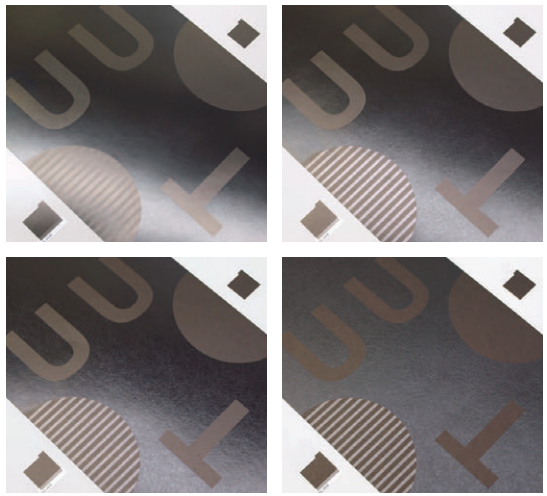
1

基本的なインキで視覚効果を確かめる —1

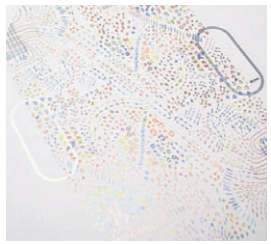
「ごく普通のインキで面白い視覚効果を狙ってみたいと思います。一つは、ブラック1色で刷った黒と、CMYKの掛け合わせでつくった黒の濃度差の確認。次に、銀のパターンにシアンとブラックの平網を隣り合わせたときの見え方。そして銀の模様の上に同じ模様でCMYを刷り重ねたときの効果。これで自分なりのチャートをつくってみます。絵柄は文字でできた顔。顔と認識したくなるような絵柄は、『もっとよく見てみよう』という思いを湧き起こすので、ギリギリ顔に見えるような絵をつくってみました」



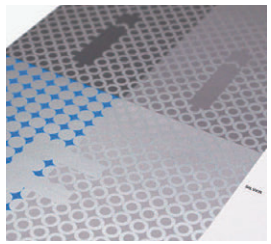
上の四つのパターンのうち、左上は、目や口の部分にブラック100%、それ以外にCMYKを全て100%で刷り重ねた濃度差を確認するテスト。右上は、銀のパターンと抜き合わせでシアンとブラックの平網を刷ったテスト。右下は、目と鼻以外の部分の絵柄の下に銀を先刷りし、その上から顔全体にCMYの絵柄を刷り重ねることで、下地の銀の影響を確認するテスト。用紙はキャストコート系、ダル系、マット系を中心に6種を選択。インキは基本のプロセス4色、銀、マットニスとグロスニスを使用した。



左上：エスプリコート、右上：雷鳥ダルアート、左下：ユーライト、右下：ヴァンヌーボV。ブラックだけの黒（アルファベットでつくられた目や口の部分）とCMYK全て掛け合わせた黒（目や口以外の部分）では、圧倒的な差が現れた。また、上にブラックをベタで刷り重ねた銀が予想以上に生きている（左頬のストライプ部分）



目や鼻などの部分以外に銀を先刷りしている。一瞬違いが見える角度はあるものの、見えにくい結果となった



見る角度によって銀とグレーが同化する効果が確かめられた

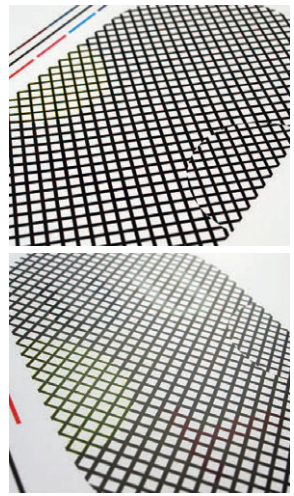
2

基本的なインキで視覚効果を確かめる —2

「前回、普通のインキを中心に視覚効果を確かめたことを踏まえながら、今回は絵柄の密度を上げたりして、もう少し複雑なパターンをつくってみました。これで銀とプロセス4色で金のようなキラキラした効果を狙ってみたいと思います。また、一部を蛍光色や彩度の高いインキに入れ替えたときの効果も確かめます。個人的には特殊な印刷にもすごく興味はあるのですが、長い時間のなかで生き残ってきたプロセス4色による掛け合わせにできるだけこだわりながら、トライアルを進めていくつもりです」

用紙は前回選んだものを中心に選択。インキは同原稿で3パターンをテスト。【A】基本のプロセス4色と銀を使用。【B】CMYKを広演色インキ「Kaleido」にして試した。【C】前述の【A】のマゼンタを蛍光ピンクに、イエローを蛍光イエローに差し替えて使用した。

【Kaleido】
従来のプロセス4色印刷では再現しきれなかったRGB画像の広い色領域を、6色、7色印刷に近いレベルで再現可能とした4色プロセスインキ



上下の画像は、見る角度を変えたときの見え方の違い。左目、口部分が一瞬見える角度がある

見る角度を変えることで顔の部位が見え隠れする。前回よりも絵柄の密度を上げたことで、見える角度が広がった

【A】

【B】

【C】

3

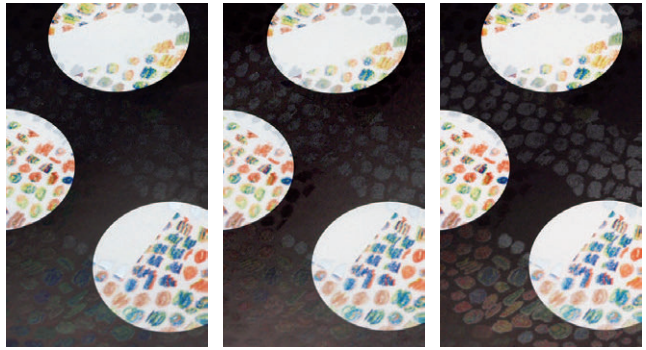
基本的なインキで視覚効果を確かめる —3

「これまでにわかった効果をどうやったらうまく取り入れられるかを考えながら絵をつくっています。今回実験するのは、一つはインキの刷り順によって見え方が違うかどうかと、ブラックとマットブラックの違い。さらに、前回から引き続いて銀の効果的な見せ方も実験してみます。頭の中では誰もが知っていると思うことばかりですが、それを実際に行いながら一番生かせることを探す、というのが私のトライアルになっているようです。知っている技法を集約して新しい使い方を発見したいですね」

ブラックの質感と刷り順の違いを確かめる

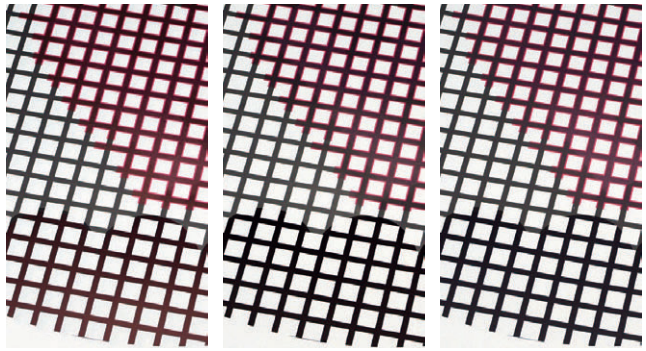
【A】銀→K→C→M→Y、【B】銀→C→M→Y→K、【C】銀→C→M→Y→マットブラック

銀以外は広演色インキ「Kaleido」を使用



左より、【A】【B】【C】。細かな絵柄部分のCMYとベタ面のブラックの刷り順の違いと、ブラックのインキの質感の違いによって、見え方にはっきりと差が現れた

顔のパーツのみ、掛け合わせとなっている。それ以外の部分はブラックのみの設計

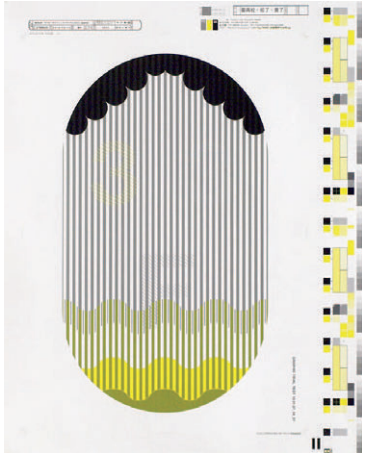


左より、【A】【B】【C】。上のパターンと同様、ブラックを刷る順番によって色合いが見える場合と見えない場合があった。ブラックを先に刷った【A】のみ、あごの「ひげ」の部分の色合いが確かめられた

銀の効果的な見せ方を試す

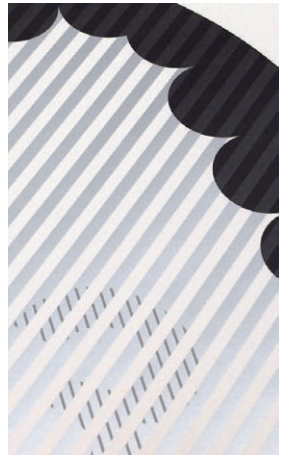
銀とマゼンタのグラデーションが左右から交差する仕組み。あごの「ひげ」の部分にのみイエローが入っている

刷り順：銀→K→M→Y（このパターンの刷り順は一通り）
銀とマゼンタのグラデーションが非常に滑らかに仕上がった



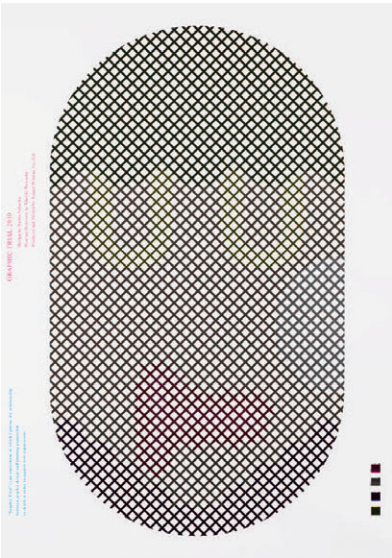
銀と同程度の明度のブラックの平網で、「3」のかたちをした「左目」を背景のストライプ状の銀と抜き合わせで配置している

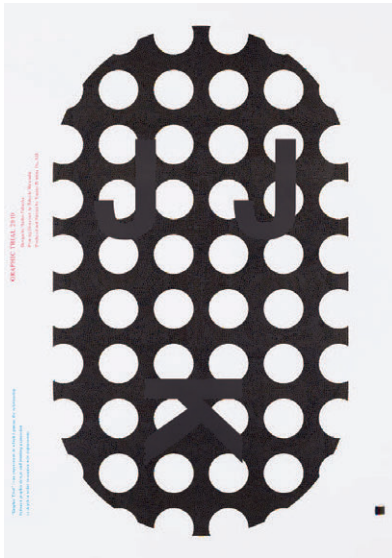
刷り順：銀→K→Y
見る角度によっては銀だけが光り、その光沢の差によって「3」が浮かび上がった

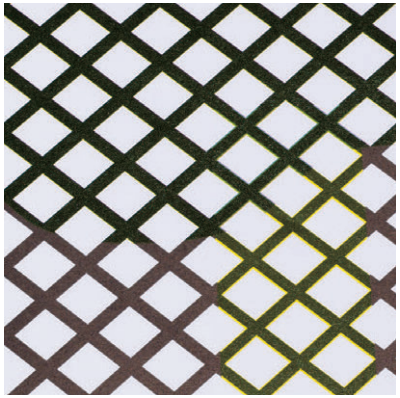


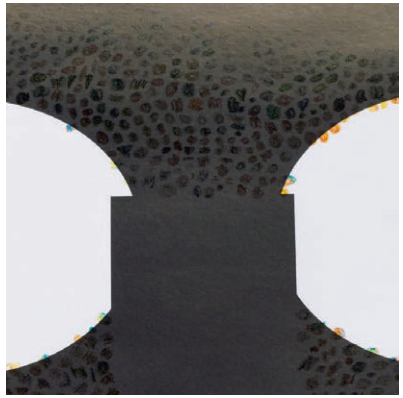
刷り順：銀→Y→マットブラック
「髪」の部分では、下に刷った銀がマットブラックの下からくっきりと現れた

FINISH
全作品とディテール

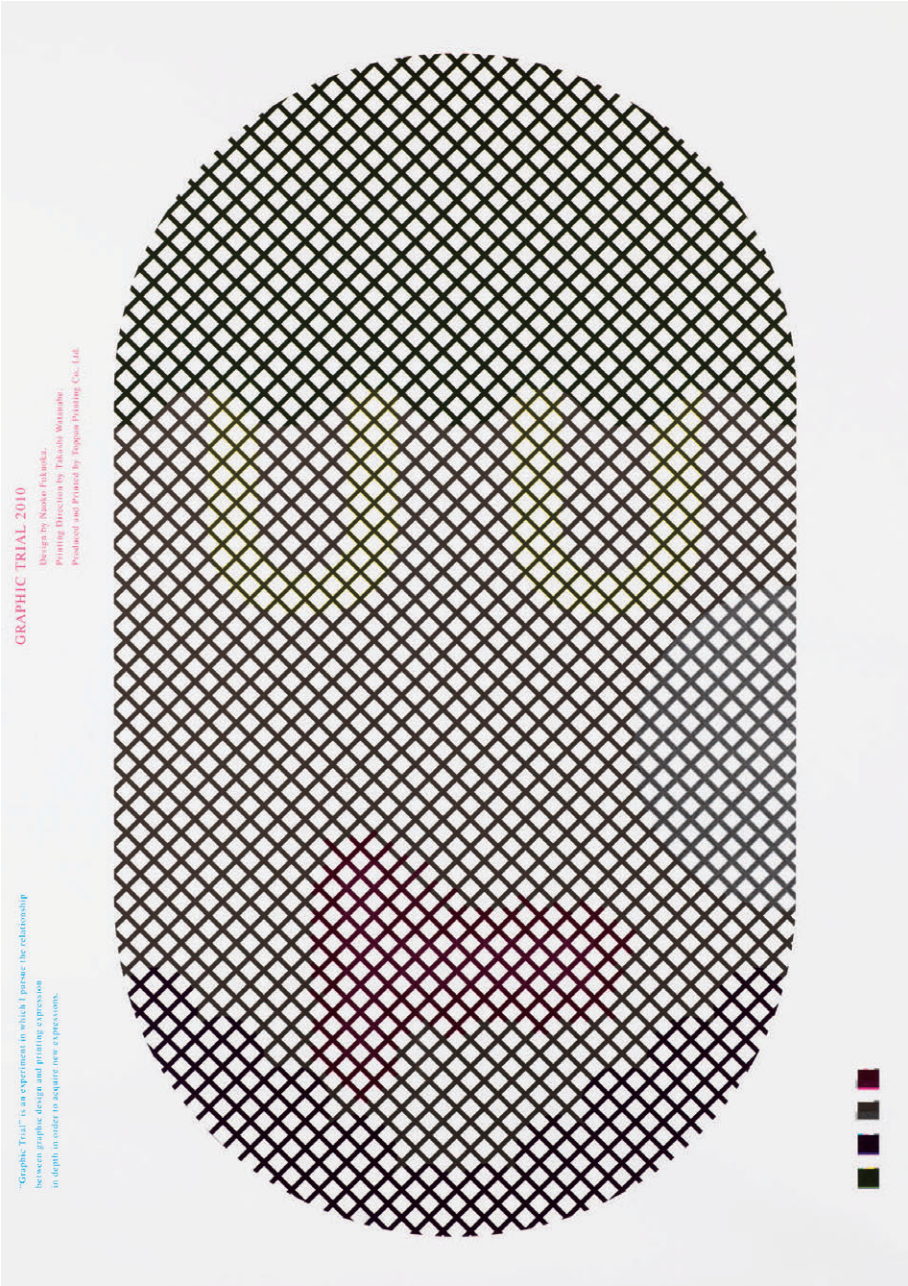






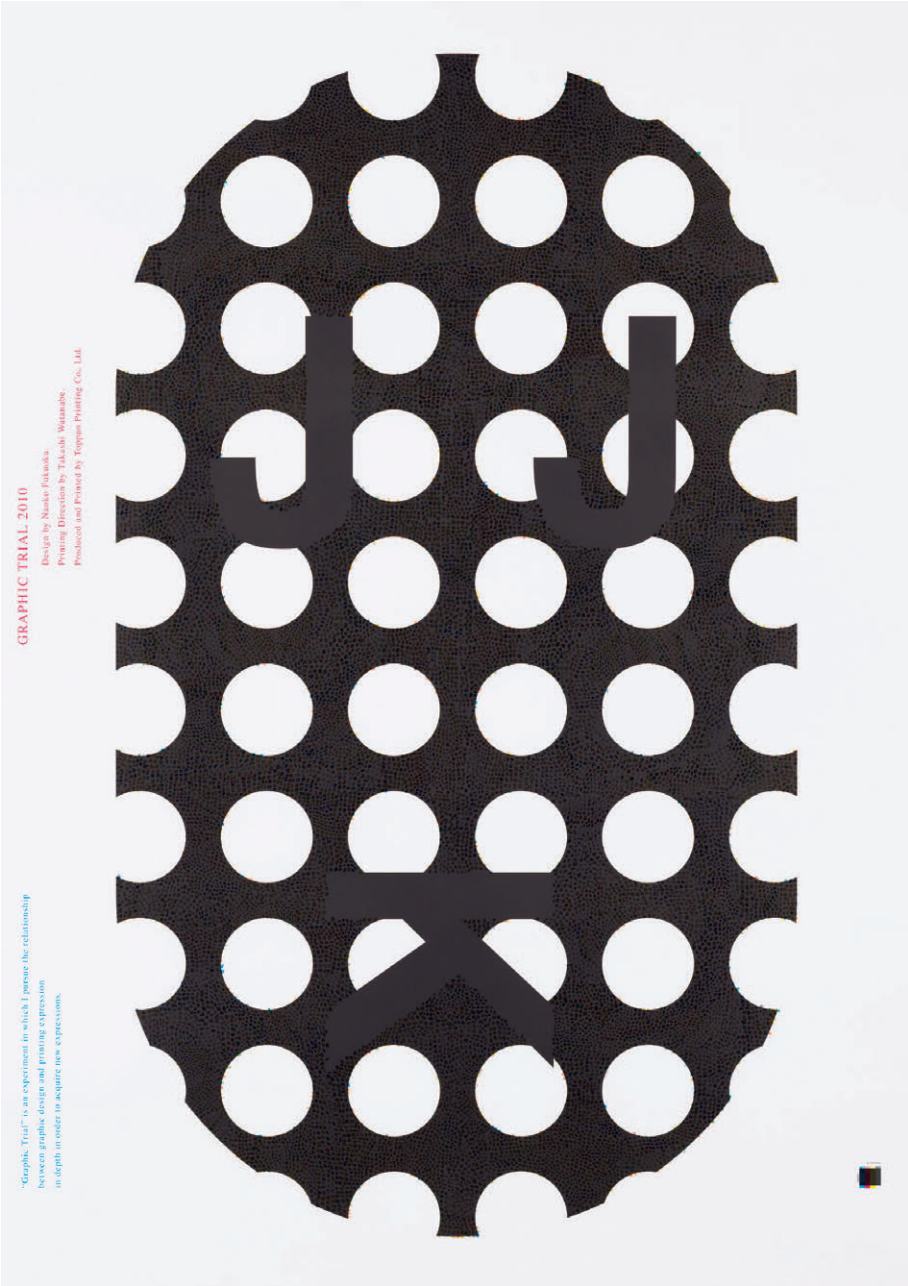


Art Direction & Design : 福岡南央子

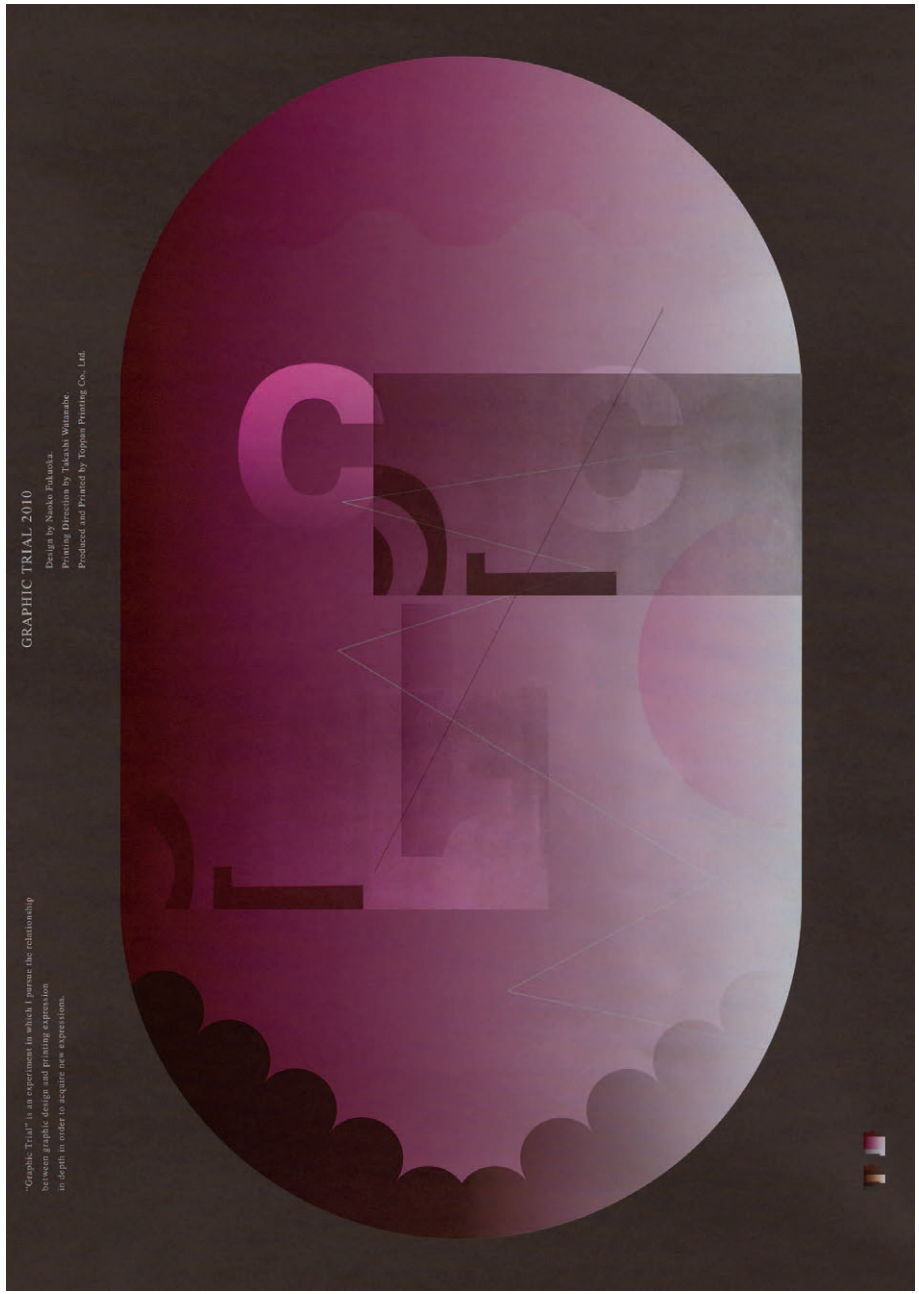


用紙：ケンラン / 白　四六判 135kg
版の構成：銀→ブラック→シアン→マゼンタ→イエロー

用紙：ケンラン / 白　四六判 135kg
版の構成：銀→ブラック→マゼンタ→イエロー
※展示作品は仕様が異なる場合があります



用紙：雷鳥ダルアート　四六判 110kg
版の構成：銀→シアン→マゼンタ→イエロー→マットブラック
※展示作品は仕様が異なる場合があります



用紙：堅彩紙 / 黒　四六判 110kg
版の構成：銀→ブラック→マゼンタ→イエロー

用紙：ヴァンヌーボV / ホワイト　四六判 130kg
版の構成：銀→ブラック→イエロー
※展示作品は仕様が異なる場合があります

AFTER TRIAL
トライアルを終えて

●トライアルを終えて

CMYKの掛け合わせは見事に整合性のとれたシステムだと思います。でも一方では絶対不変だと決めつけてしまいたくないという思いもあります。もしも「これが絶対だよ」と思いこんでしまったら、そのジャンルが自分の中で死んでしまうような気がするからです。だから「一応そういうことにしておく」というカッコ付きの定義にしておいて、いつもどこかで「他にもあるかも」と思える可能性を残しておくようにしています。今回もそんな位置から取り組んでみました。

その結果、多くのことを発見できました。まず、紙はインキとの組み合わせや、表現の意図や目的でいろいろな選択肢があることを改めて実感しました。インキの物質性についても再認識できました。たとえば、銀とブラックは見る角度によって銀がブラックより黒くなる瞬間があります。それを目にして「K（ブラック）」は「黒」だと思い込みがちだけれど、黒である前に物質だということを改めて理解できた、というようなことです。

そしてもう一つ大きな成果だったのは「ゼロからつくる」自分なりの方法を発見できたことです。いつもは必ず相手があって制限もある中でデザインをしています。それが全て自分で好きに考えて提案するなんて、今回が初めての経験だったように思います。トライアルを通じて「題目がないというのも題目だ」と発想を変えることができたことは、いい経験になりました。

今回の私のトライアルは世紀の大発見では決してないでしょう。「そんなことわかっているよ」と言われてしまうことかもしれません。でも物質って論理的にはいかないからこそ探しどころがあるもののように思います。印刷物という物質の面白さに出会えたことが、実は一番の大きな発見だったのかもしれません。

―― 福岡南央子

●プリンティングディレクターから

はじめに、自分は福岡さんを担当することができてほんとうにラッキーだったと思います。基本を考えてデザインをつくるというコンセプトで、インキはレギュラー４色プラスアルファのみ、日常的に応用がきく範囲の中でのトライアルは、私にとってもものすごく大きな経験になりました。

というのも、普段は主に写真集を担当しているため、デザインだけで構成された作品はほぼ初めてだったからです。大胆で実験的な版設計をすることよりも、再現性を追求する手堅い仕事を中心に手掛けてきた自分には、慣例にとらわれずに「とにかく実験してみよう」と挑むスタンスはとても新鮮でした。おかげで私自身も理屈としては知っていても、経験のない現象にたくさん遭遇できました。用紙違いや、銀やスミの刷り順の変化による見え方の違いをこの目で確かめられましたし、４色をベタで重ねるという通常の印刷物ではタブーとされる掛け合わせも試すことができました。

このような経験は皆無だったので、自分の知識や経験を生かしてサポートできるかかなり不安だったのですが、どうにかやり遂げられて今はホッとしています。

―― 渡辺 孝